

平成 30（2018）年度 国立大学図書館協会近畿地区助成事業

「オープンサイエンス時代の大学図書館－これから求められる人材とは－」アンケート結果

京都大学図書館機構（図書館業務改善推進会議 人材育成部会）

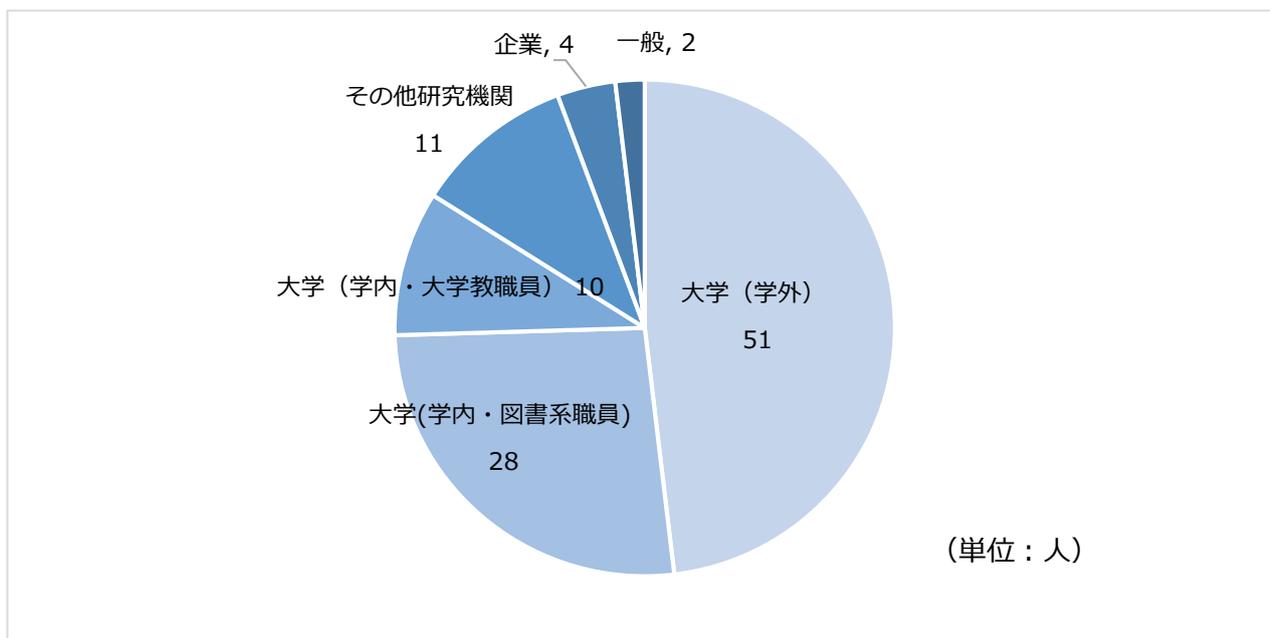
開催日時：平成 31（2019）年 2 月 13 日（水）13:15～17:00

開催場所：京都大学附属図書館 3 階 ライブラリホール

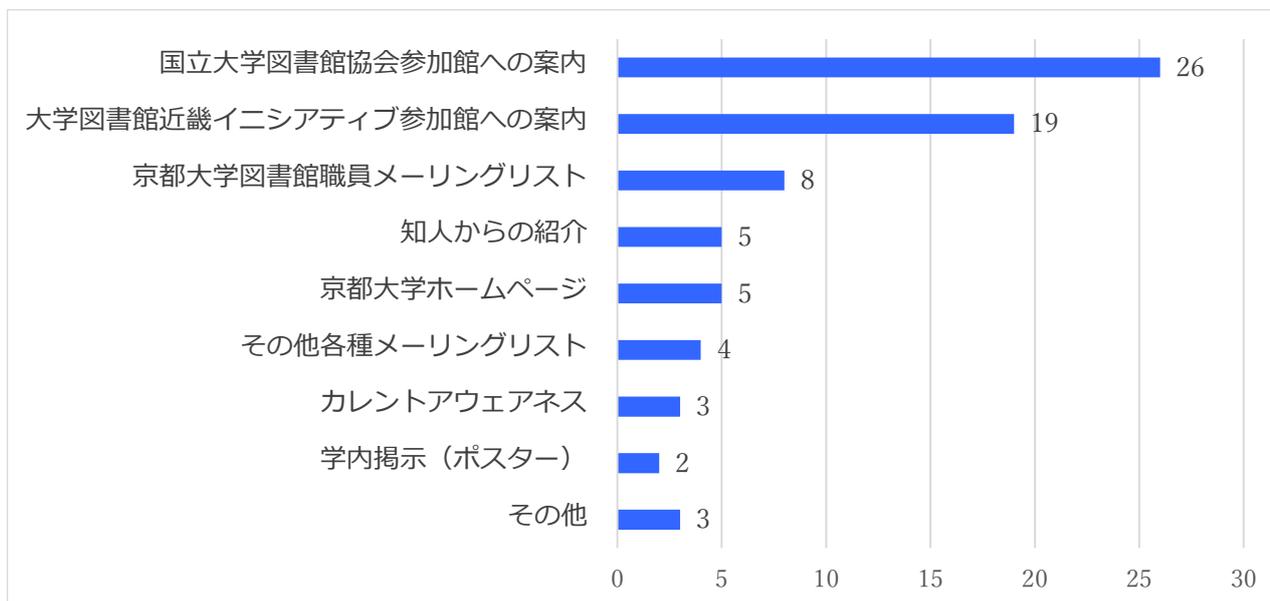
参加者数：106 名（学外者：68 名、学内者：38 名、講師陣（5 名）・スタッフ（8 名）を含む）

アンケート回答数：70 名（回答率 75.2%）

1. 全参加者の所属



2. 本講演会を知った情報源（複数回答可）



3. 講演内容に対する意見・感想

3.1. 講演1「オープンサイエンス時代の大学図書館：教育、研究のパートナーになるために」(竹内 氏)

80年代からの大学図書館の流れをふまえてオープンサイエンスの流れがあるという位置づけが分かりました。各館では何をしたいか分からないという話になりがちですが、先導的事例をまず作るという具体的な道を示していただけました。
他の部署との連携が難しいが、重要だと感じました。
私も無意識に「支援」「サポート」という言葉を使っていた。基本的な姿勢を改めなければ、と思った。周りの職員を巻き込むためのたくさんのヒントを頂いた。
設備だけでなく、どのような機能や人の力が提供できるかを考えることが大事と思いました。
オープンサイエンス時代となると研究面の話がメインになりがちですが、その流れの中で、どのような“教育”支援ができるか、という話が面白く、考えさせられました。
紙から電子への意識の切り替えの必要性を改めて実感した。ラーニング・コモンズにおける人的サポートの重要性は理解しつつもどのように進めていけばよいか迷うところだったが、他部局との連携に光が見い出せた。
オープンサイエンスと図書館員を取り巻く状況について流れや概況、方向性がよく分かり大変参考になりました。
オープンサイエンス時代の大学図書館がどうあるべきなのか、漠然としていたものが、少しどのように進んでいけばいいのかわかりました。できることから取り組めたら、と思います。
「オープンサイエンス時代」に乗り遅れないように、と とにかくりポジトリの立ち上げを担当させられたので、基礎となるもの、方向性など知識を得ることができました。
学術情報のオープン化の今までの流れや今後について俯瞰的にお話を伺って大変勉強になりました。
データ中心の図書館になるということをはっきり言葉で認識させていただきました。でも、データが、まだしっかりとイメージできない、。
論文のオープンとデータのオープンは異なると改めて感じています。特に私は理系大学に努めていますので難しい課題だと思います。
各部署で小さなミッションは異なるので、学修・研究支援という大きなミッションで協力するのはこえるべき、ハードルが高いと感じました。
オープンサイエンスと教育支援のつながりについて改めて考えられた。
いつも通り、全体の大きな流れと挑戦的な提言が気持ち良かったです。ありがとうございました。
オープンサイエンスの流れが現場の実践を反映しているとの話で、全く別の場所にある話ではないのだと思いました。
オープンサイエンスの話の中にラーニング・コモンズが出てくるのがかなり意外でしたが、ラーコモがバーチャルな空間も対象としているというところで、話がつながり合点がいました。
なんとなく感じていた図書館の未来をはっきり示していただいたと感じた。
オープンアクセスやオープンデータというテクニカルな部分だけでなく、「オープンサイエンス時代」という広い視点でのお話で、図書館の立ち位置を俯瞰することができ、たいへん有意義だった。
よく分からない研究データ管理について、分かっていること／まだ分からないことを整理して説明いただけた。
大学図書館員が知っておくべき流れ、ポイントをたいへんわかりやすくお話いただき、理解が深まりました。
リポジトリとオープンサイエンスの関連について、これまでの動きを含めて説明いただいたので、参考になった。また、一機関でかかえこまず、連携という話があり、難しく考えることはないと思った。

<p>図書館が研究データ管理をしていくことができるのかと思っていましたが、すべてを担うことは現実的ではないとうかがって、少しほっとしたような気持ちになりました。</p>
<p>オープンサイエンスにどうやって取り組むか全く見当がついていませんでしたが、ラーニング・コモンズやリポジトリを基盤にして考えていく、と聞いて少しビジョンが見えてきたような気がします。</p>
<p>リポジトリをベースにした大学図書館の体制づくり、が印象的でした</p>
<p>「紙資料にこだわりすぎている」「文献検索のような、伝統的な活動しかしていないのでは」というご指摘は、耳に痛かったです。本学ではまだその段階です。もっと教員と連携していきたいと思っています。</p>
<p>オープンサイエンスの基本的な考え方や、オープンアクセスからどのように発展させていけばいいかなど、取っかかりが見えて分かりやすかった。</p>
<p>これからの大学図書館に求められる機能像について、改めて考えさせられる内容でした。</p>
<p>紙から電子へ、の流れと、オープンサイエンスの方向性がこれからの大学図書館の方向性である、ということが大変わかりやすかった。</p>
<p>図書館はデジタル・オープンアクセス化していくが、そのデータを生かす環境を構築するためには研究者、教務系、図書館員という人と人とのつながりを築いていくアナログ的努力が必要。</p>
<p>「設計図」を描くことで、未確定なものが明らかになって、サポートではなく「パートナー」となっていければと思いました。</p>
<p>新しい大学図書館としてのモデル構築を積極的に他部署とともに取り組む必要があると思いました。教育へのアプローチに関心があります。</p>
<p>学習支援やラーニング・コモンズについてのお話が大変わかりやすく興味深かったです。</p>
<p>流れが理解できました。少しずつでも変わっていけるよう、ファーストペンギンを支援する仕組みが必要だと思いました。</p>
<p>図書館の将来展望について見通しが良くなった。一方で、図書館がなぜ研究データまで扱わなければならないのか完全には理解できなかった。</p>
<p>1980年代モデルからの脱却がしきれていない環境で、どのようにフォーカスをデジタルに切り換えるのか大変そうですが、そのあたりでURAと何か共同することも可能なのかもと思いました。</p>
<p>リポジトリやラーニング・コモンズなどこれまでの大学図書館の動きを交えながら、オープンサイエンスにおける大学図書館の方向性をご提示いただいたので大変勉強になりました。</p>
<p>「政策的動向に翻弄されるのではなく、大学図書館のあり方や機能を刷新する機会にする」という考え方が大変刺激的だった。</p>
<p>ラーニング・コモンズの現状とあるべき将来像について示唆を頂きました。</p>
<p>研究費の申請から、文献・実験ノートの管理からリポへの登録までが、システムチックに進むことが研究者の方にとって理想的ということが、よくわかりました。</p>
<p>論文とデータの比較が参考になりました。先導的な事例への期待が高まりました。</p>
<p>オープンサイエンス時代の研究データの管理がいかに大事であるかがわかりました。</p>
<p>ラーニング・コモンズの在り方が Informatin コモンズに留まっているという指摘がとてわかりやすかったです。</p>
<p>大変有意義であったが、実際に支援を行う学生・研究者の視点の考え方・意見も欲しかった。まだ図書館員は、学生の学習・研究者の研究における「クセ」が十分に分かっていない部分もあるのでは？</p>

3.2. 講演 2「アカデミックデータマネジメント環境での図書館員の役割」(梶田 氏)

ユニットでの活動の実態や展望などを知ることができ、参考になりました。
図書館員の役割、未来像について改めて考えることができました。
視野を広く、大学全体の動き、しきみを意識しようと思った。
オープンサイエンスに限らず、関連部署との連携は重要と思いました。
データマネジメントに関して、研究者としての立場から方向を示してくださったので、図書館として何ができるか可能性を考える機会となりました。
研究者の視点からの活動内容が興味深かった。
海外でのご活動、事例を紹介していただいて興味深く拝聴しました。
図書館職員として何ができるのか、考えてみたいと思います。
データ保存に関することは、先送りにしていますので今後の参考になります。
データマネジメントも図書館員の資質に必要なと感じました。
研究者支援のできるスキルを身につけなくてはならないと思いました。
「研究データのための図書館」の情報がためになった。
京大さんが、図書館も 1 ステークホルダーとして、先生方と協働されていることに非常に感銘を受けました。全体のイメージ、仕組みを分かりやすく伝えてくださり、面白かったです。
研究データマネジメント環境を提供し、研究者の支援を進めている状況が分かり大変勉強になりました。
図書館を広い視点から見た現状が分かりました。
Purdue の事例、京大(葛)の事例が、とても参考になった。実際に研究に従事されている研究者の先生によるお話は、図書館には分からない部分についていろいろ知見を得ることができた。
研究者のコンテキストの一端を知ることができました。
図書館が具体的にどのような関わりができるのか、関係者とのコラボの方法が示されており、参考になりました。
京都大学における研究組織の検討状況がわかり参考になった。また、RDA23 のアドバイスは初見でした。
図書館が研究データの管理に関わってもよいのだな、必要としていただけているのだな、という気持ちになりました。
先進事例を紹介していただけただけなので確認してみようと思います。出来上がった論文だけでなく生のデータを取り扱うとなると図書館だけではできないし、研究者の方の意見や研究の流れを知ることが重要だと感じました。
本学は文系の大学ですが、データとは何にあたるのか、どう支援すればよいのか、一度真剣に考えてみたいと思います(アーカイヴ?)。教員の声もひろえたらうれしいのですが、そこまでまだ連携できておらず・・・
研究者の側からのお話で参考になった。簡単なことではないと思うが、「研究支援の場」として図書館が目指すべきものが示されていたと思う。
RDA の 23 のアドバイスについては研究者から図書館に期待される点を見た思いがしました。
10 年後 RDA の「研究データの図書館」からの 23 のアドバイスの項目がどれだけ達成できるのか楽しみです。
図書館がどの場面でどのようにし支援にかかわるべきか、情報収集していきたい、10 年後の図書館の役割を考えたい。
研究者が考えるデータマネジメント環境がとても大事と思いました。これから少しでも実現していけばと思いました。
「院生レベルの教養教育で DMP 教育を行う」RDA の 23 のアドバイスなど自学での検討の参考にさせていただきます。
「研究データの図書館」からの 23 のアドバイスを知らなかったのが、参考にさせていただきます。
データをただ「管理」するだけでよいのだろうか? もっと「活用」にも関われないか。

3.3. 講演3：「大学図書館によるオープンサイエンス支援：国内事例を作る」（山中 氏）

検討中の課題等について、詳細を知ることができ、参考になりました。
やるべきことを具体的にたくさんあげていただき参考になりました。
自分の大学で行うには課題がたくさんあると感じました。
具体的な事例がありがたかった。プロフェッショナルでありたいと思い直した。
京大さんの具体的な動き、流れがきけて良かったです。特に教員からの意見や私見の部分は自分たちの機関で動く際に、大変参考となります。
京大さんでも手探りしながら進めておられることを知り、少し安心した。山中さんの私見の部分がとても参考になると思う。
貴館の取り組みと恐らくいずれ自分も直面する課題や検討するポイントについても知ることができた。
実際にどのように取り組んでいらっしゃるのか知れて参考になりました。
検討なく船出してしまった感があるので足元を固めることの大切さを改めて感じました。ぜひ情報交換させていただきたいです。
同じ図書館員として、オープンサイエンス支援のとりくみは参考になりました。
京大が現在取り組まれていること、考えるべきことが多いことよく理解できました。
教員や、大学の組織内でのデータ管理部門と連携する重要性
具体的な事例や検討事項についてうかがえて参考になった。
大学図書館として実際に取り組まれている事例から、学ぶべきこと知っておくべきことが多くあることを知りました。
「知っている必要があること」がまだまだあるなあと印象付けられました。と同時に、今やっている業務は何を知っているからできているのかを意識する大切さも感じました。
前のお二人と違う図書館職員のお話を聞くことができました。
図書館がやる業務として、具体的なイメージを描く手助けになった。
道のないところでの悩み、努力を提示いただけました。今後につなげる／広げるのが重要ですね。
京都大学ではさまざまな部署の連携が進んでいると強く感じました。タテ割の本学も見習いたいです。
京都大学図書館での検討概要、課題がわかってよかった。
図書館員の立場から、より具体的な事例をうかがうことができ、今後、自分が考えていくことの参考にさせていただきたいです。
図書館員の目線だったのでより具体的にできそうなことが見えてきました。ぜひ今後も取り組まれたことと結果を発表していただきたいです。
本学ではまだまだ「リポジトリを充実させていこう」というレベルです。オープンアクセス化に向けて、きちんとしたプロジェクトチームが動いているところ、非常に参考になりました。ありがとうございます。
具体的に検討すべきこと、準備すべきことが分かって参考になった。現場レベルでオープンサイエンスにどうやって取り組むか、自分の職場で提案する際にも助けになりそうだった。
京大図書館のとりくみについて大変参考になりました。
現在まさに作っている過程であることがよく分かり参考になった。事例報告はよくあるが、検討段階から紹介してもらえるのはありがたい。
図書館員の立場から具体的な内容、課題が提示されており、共感する部分が多かった。
KURENAI からクラウドシステムへの移行（論文＋データ）が良いように思う。教員は大学が変わることが多いので、1つのシステムにした方が、データも利用しやすいのではと思いました。

「図書館が関わる学内の検討体制」でどう基盤を整備していこうとしているのかよくわかりました。
他部署、教員との連携を通じて事例を作る必要がある。
今後自分たちが取り組んでいくべき課題について、改めて考えさせられました。
やるべきことがたくさんあるため、こちらも少しずつでも実現できればと思いました。
同じ大学にいながら現状を知らなかったのも、今まさに検討されているところということがわかり参考になった。
論文のエビデンスデータの公開などは、自分が担当している人社系研究ではあまり聞かない話でしたので、検討が進んでいることは恥ずかしながら新しい発見でした。その他もオープンサイエンスという概念的な話の具体的な現状がよくわかるお話で勉強になりました。
京都大学での取り組みをわかりやすくご紹介いただいたので、自学での検討の参考にさせていただきます。
担当業務に近い内容で非常に参考になった。
京都大学さんのようなリポジトリが充実した大学でも、研究データのためにジャイロクラウドを検討されていることに、様々な可能性を常に探求されていることに感銘を受けました。
今できることは何か、の視点が良かった。が聞けば聞くほど厄介な印象。
私見のやるべきことリストは共感することが多く、参考になりました。
投稿料の問題、やはり気になる。
竹内先生の話でもあったが、いきなり全分野にあてはまる基盤やガイドラインを作るのは難しいのでは。まずは、特定の分野／研究室とタグを組んで、事例を組み立てる方がよいのでは。

3.4. パネルディスカッション

人材育成(再教育含む)の重要性を感じました。
図書館がこれからの時代にどのように役立てるのか、考えていかなければならないと思いました。
10年後、図書館や図書館員が生き残るためには、どうすればよいのか考えていくきっかけとなるようなお話でした。ありがとうございました。
ラーコモが生き残るためのよいネタだったというのはその通りだと思います。本学も図書館以外にコモンズスペースがたくさんあり、それぞれのコモンズで何ができるかというのを学生さんに分かるように色々しています。貴重書の電子化の時の議論というのがあるのは知らなかったです。人材育成が今から間に合うとよいなと思っています。
データを公開し、どのように活用されるのか、視野に入れて進める必要があること、わかりました。
竹内先生の人材育成に関するコメントがたいへん参考になりました。
講演だけではうかがえなかったようなお話がたくさんあり、勉強になりました。
まだまだ実践も考えていくことも足りていないと思いました。欧米の事例もですし、国内の事例・議論が増えてほしいです。
「これから求められる人材」について質問があったが、今の図書館員が何を求められているか気になりました。
人材育成について、新しい職種と、現在の人材再教育が大きな課題となると思いました。
他の方々がどんなことに興味を持っているのか伺えてよかったです。
オープンサイエンスは流れで、これまで(成果物の公開)は点である。今後は点だけでいいということではなく「流れ」全体は必ず意識すべきという表現が非常にわかりやすかったです。
大学図書館職員の専門性、専門職性については個人的に関心があった。もっとお話を聞きたかった。
オープンサイエンスのみならず、図書館界の未来についても改めて思考を巡らすことが出来ました。

4. 各講演の内容で最も印象に残った一言

4.1. 講演1「オープンサイエンス時代の大学図書館：教育、研究のパートナーになるために」(竹内 氏)

(図書館が教育、研究の)サポートではなく、パートナーになる(意識を持つ) [16名]
求む！ファーストペンギン(先導的な事例をまず作る) [9名]
価値の再発見と新しい価値の創造 [5名]
データマネジメントをモザイク状に考える。 [3名]
オープンサイエンスの方向性と国立大学図書館協会のビジョン2020が示す方向性は基本的に一致。

4.2. 講演2「アカデミックデータマネジメント環境での図書館員の役割」(梶田 氏)

(データマネジメント環境構築の)ボトムアップとトップダウンの連携 [5名]
10年後に、〇〇していると思いますか？ [3名]
研究データはオープンありきではない [2名]
Herding Cats! Tiger Team [2名]
大学の戦略と研究者の思いをどうコーディネートしていくか？ [2名]

4.3. 講演3：「大学図書館によるオープンサイエンス支援：国内事例を作る」(山中 氏)

私たち(図書館員)はプロフェッショナルなので、業務ができる水準を満たす必要がある。 [7名]
図書館員として研究データマネジメント業務全体を学ぶ必要がある。研究倫理審査規程も見ておくべき。 [6名]
今できること、将来できることに場合分けして検討すると議論が進む。 [4名]
新しいことをやり始めるときは「これをやって何になる、これより大事なことがある」という声は、都度、必ずある。 [4名]
オープン化へ取り組むだけでも、やるべきことがたくさんある。できることから取り組む。 [3名]

4.4. パネルディスカッション

新人を育てるだけでなく、既存の図書館職員の”再教育”(学び直し)の場が必要 [4名]
図書館員は出版されていない資料も整理してきた。蓄積してきた知識・技能はデータにいかせる。 [3名]

5. 講演会全般に対する意見等

データ管理全体について、大学院教育としていれこんでとりくむべきという視点に目を開かされました。そういったところから、「データ」という曖昧なものに対して、研究者も、関わるいろんな人も共通理解ができていく、オープンアクセスより更に地道な取組が必要なのだらうと感じました。
これからは論文だけでなく、「データ」も収集して、公開する時代なのだと分かりました。それには、乗り越えなければいけない課題が多いということも。
新しい発想と他との連携で図書館が変わっていくのはすぐそこに来ている感じがした。
大変満足の内容でした。京大でのオープン化の進み方が変わりましたらまた開催して頂きたいです。
資料の文字が小さく、判読しづらかった。

6. 今後、講演会でとり上げてほしいテーマ等

オープンサイエンス／オープンデータについて継続して取り上げてほしい [4名]
高騰する電子ジャーナル経費への対応策
従来の統計データのみでなく、今後デジタル化に対応した統計、分析や理解、活用をとり上げてほしい。
(図書館職員の)人材育成の事例や方向性
日本目録規則 2018 版公開と、コーディングマニュアルへの影響